

**論文審査の要旨および担当者**

報告番号	甲 第 号	氏 名	黄 仙惠
論文審査担当者：	主査	慶應義塾大学教授 博士（政策・メディア）	加藤 朗
	副査	慶應義塾大学教授 MBA	岸 博幸
	副査	慶應義塾大学教授 博士（政策・メディア）	石戸 奈々子
	副査	東京都市大学准教授 博士（政策・メディア）	李 洪千
(論文審査の要旨)			
<p>黄仙惠君の博士論文は、ノンフィクション番組の海外展開可能性を拡大するためのローカライズをマネジメントする制作プロセスと題し、また、日・韓の放送コンテンツを中心に、という副題が付されたもので、全部で10章から構成されている。TVドラマやアニメーション番組に関しては、我が国で放映されたコンテンツが他国に輸出されて放映されることが増えてきたが、ノンフィクション番組に関して輸出されるケースは必ずしも多くはない。その一因は権利処理の問題が厄介なためであるが、番組コンテンツとしても、字幕や音声の吹き替えだけでは相手国での放映に適さないことも少なくないことにも因る。制作国では常識的な事柄が、輸出先ではそうではないこともあり、その場合、字幕や吹き替え音声によって原作にはなかった説明を加える必要がある。また輸出先の政治的・文化的状況によって一部の映像の差し替えが必要になることや、またレイティングシステムによって放映できる時間帯に制約が発生する場合もある。従来は原作国での完成された放送コンテンツをベースに、字幕や吹き替え処理を行っていたが、編集をより容易にするため、本論文では、完成した映像作品ではなく、編集の際の「のりしろ」に相当する部分を含んだ完成作品の一つ手前の段階である「白完成パッケージ（白完パケ）」の段階で一旦作品を輸出し、輸出先での編集の自由度を高めることを提案している。単なる提案ではなく、本提案方式に基づき、実際に TV で放映された番組に適用し、アクションリサーチの手法を用いてその実践的な評価を行っている。</p> <p>本論文は第1章の序論に続き、第2章では放送に限定しないローカライズ、第3章では放送コンテンツの海外流通の事例について調査し、それに基づいて第4章で放送コンテンツのローカライズデザインプロセスについて検討し、続く第5章では、ローカライズプロセスの体系化として詳細なローカライズ手法について提案している。また、このローカライズ手法をベースに3本の TV 番組の制作に応用する際に、アクションリサーチとして適用するコミュニティの定義も行っている。これに基づいて、第6章では、最初の試みとして、「巡・韓国」という60分番組計13回分の制作を行う際の、原作である韓国側のプロダクションやそれを受けた日本側のプロダクションからのフィードバックを元に制作方式を評価し、問題点を明らかにしている。第7章では第6章の番組の続編である「巡・韓国2」（60分番組13回）の制作に対して、第6章で述べた「巡・韓国」での経験を踏まえ、監修プロデューサなどを任命し、ローカライズされたバージョンの品質向上を図った。さらに第8章では日本の音楽番組（30分番組系24回）を韓国に配信する際に本論文で提案した方式を適用する際の評価についてまとめており、第9章では3番組の制作を通じた評価によって本方式の特徴を明らかにしており、最後の第10章で結論として研究をまとめている。</p> <p>両国のプロダクション間のやりとりは、将来は「白完パケ」だけにすることが理想であるが、本論文に関係したプロダクション全ては、意欲や知識はあったものの、国際協業の経験はなかった。そのため本論文では、プロダクション間のコミュニケーションを円滑にすることを重視した。これによって、番組の意図が誤解なく伝達され、また撮影にも役立てることができた。その結果としてローカライズされた作品の品質に貢献していると考えている。</p> <p>本論文は、実際に放映された TV 番組に対して提案手法を適用することにより、実践的な評価を得ている。また、その際に発生した種々の問題は、国際的な展開が予想される TV 番組の制作に対する多くの教訓を残している。本論文の成果を応用することによって、TV 番組の国際的な展開が容易になり、また輸出先でのローカライズされた作品の品質の向上に貢献することが期待され、博士（メディアデザイン学）の学位に相当する成果であるといえる。</p>			
審査経過			
1. 2016 年 1 月 18 日、10:30～12:30 予備口頭試問審査が協生館 C6N10 会議室にて開催され、審査の結果合格した。予備口頭試問審査委員：中村 伊知哉、岸 博幸、加藤 朗			
2. 2018 年 12 月 28 日、10:00～11:30 博士論文公聴会が協生館 C3S01 教室にて開催された。同公聴会終了後、同教室で博士論文審査会が開催され、全会一致で合格を決した。なお、公聴会出席者は以下の通りであった：			
博士論文審査委員		4 名	
審査委員以外の本研究科委員		1 名	
その他の来場者		2 名	